

多様で自由な外国語学習と対話のススメ（特集 学びの最適化のために）

| | |
|-----|---|
| 著者 | 中山 悟視 |
| 雑誌名 | 尚絅学院大学紀要 |
| 号 | 77 |
| ページ | 11-13 |
| 発行年 | 2019-07-19 |
| URL | http://doi.org/10.24511/00000409 |

多様で自由な外国語学習と対話のススメ

准教授 中山 悟 視

二十数年前、私は大学院に入学すると同時に、英語教員としての道も歩み始めることとなった。仙台市内の県立・私立の高等学校で、英語科目の非常勤講師として英語を教えながら、自らも大学院で英語英文学専攻に在籍し、英語力を向上させるべく学んでいた。当時は、英語を自在に使いこなせるようになること（だけ）を期待して、授業で与えられた英文をひたすら読んでいたように思う。与えられた教育と、目の前にあるシステムに則っていれば、自分の目標に到達できると思い込んでいたのだ…。

英語科目を担当していると思うことは、英語が苦手な学生・生徒は二十数年経っても変わらず一定数存在している、ということだ。いや、むしろかなり多い。さらには、私自身が大学で英語を学んでいた頃以上に、今の大学生は英語を学ぶことを当然視されている。英語は多くの大学で必修科目に設定され、大学生が身につけるべき常識のようにカリキュラムのど真ん中に居座り続けているし、英語力を示す数値（TOEIC や英検）が就職活動の大きな武器になると信じられている。この英語偏重の傾向が続くのは、本学の菊池哲彦がいみじくも指摘したように、このグローバル時代において英語が「役に立つ」学びだからなのだろう（『学問の居場所』『尚絅学院大学紀要』第71号）。しかし、何の議論もなく「英語」だけが必ず履修する科目のままであることに問題はないのだろうか。必修科目の「英語」は、本学が指向する「学びの最適化」の障壁とならないのだろうか。

今年度、尚絅学院大学は、1学部6学科体制から、3学群5学類体制への再編を実行した。この度の学群・学類制の特徴は、人文社会学類およびそのカリキュラムに顕著だ。つまり、学生が選択することのできる科目が増えたことで、様々な学生のニーズに対応する「多様な選択肢」が用意されたのだ。人文社会学類には、5つの「学びの領域」がある。この5つの領域（現代社会領域、地域実践領域、都市生活領域、国際文化領域、メディア表現領域）は、再編前の3つの学科（表現文化学科、現代社会学科、環境構想学科）と人間心理学科の「人間学分野」に加え、学科を越えた学びを推進するために用意されていた2つの学科横断型コース（国際教養コース、地域実践コース）が整理・再編成されることによって成立している。すなわち、これまで各学科内、もしくは各コースだけに提供してきた学びの機会を学類全体に開放し、学生自らが「選べる」ようになったのだ。2つの学科横断型コースの考え方に胚胎していたように、学生個々が「学びたいことを自由に学ぶことのできる体制」、すなわち今回、人文社会学類に導入された新しいカリキュラムこそが、この再編成に期待される「学びの最適化」を実現する核となっている。

その新カリキュラムでは、多様な学びの機会を提供するべく、227科目もの専門科目（自由科目を含む）が配置されている。そのうち必修科目は9科目と非常に少ない。3科目が1年次の導入科目（人文社会学総論、人間学入門、社会学入門）で、あとの6科目は少人数で行うゼミ形式の科目群（専門演習Ⅰ・Ⅱ、総合実践・演習Ⅰ・Ⅱ、卒業研究Ⅰ・Ⅱ）となっており、選択の自由度の高さがよく分かる。また、全学類共通の教養教育科目においても、必修科目は多くない。キリスト教概論Ⅰ・Ⅱと学院の歴史を学ぶ「尚絅学」以外は、基盤演習Ⅰ（情報リ

テラシーを含む）・基盤演習Ⅱ（ライティングを含む）、健康・スポーツⅠ、キャリアデザインⅠと、最小限度に留まっている。このように必修科目が少なければ、それだけ多くの科目を、学生が自ら選んで履修することができるのだ。

しかし、このように新カリキュラムでは各科目で高い自由度が実現しているにもかかわらず、英語科目は2科目が必修科目になっている（英語リーディングⅠ、英語コミュニケーションⅠ）。英語は、情報リテラシーやライティング（日本語での文章作成能力）と並んで、「役に立つ」知識・コミュニケーション能力として、必ず履修することが求められる科目に設定されているのだ。つまり、今回の再編成によっても、英語に関しては学びの自由が約束されていない。

私は、外国語学習には、学びたいという欲求・動機付けが不可欠だと考えている。もちろん移住や生活に伴い、必要に迫られて外国語を身につけていく場合もあるが、それでもやはり大学で英語科目を必ず履修する必要性は感じられない。むしろ、英語が苦手と感じている人にとってみれば、中学3年間と高校3年間の計6年間（小学校も含めればもっと長い期間）で、英語に対する苦手意識は、もう十分過ぎるくらい味わってきたのだから、一度解放してあげた方がよい。代わりに別の外国語を学んでみれば、その外国語が得意になるかもしれないし、むしろ「英語の方がよかった」と英語を再び学びたくなるかもしれない。やっと逃げ切ったと思った英語が、大学に入ってもゾンビのように立ちはだかってしまうのでは、学びの最適化どころか、英語の「再敵化」だ。

その一方で、英語科目を担当している立場からすれば、英語や他の外国語をもっと学びたい、語学力を自分の強みにしたい、と考える学生が増えることは喜ばしいことだ。学生のニーズの多様化と現代社会のグローバル化を考慮すれば、外国語教育の学びの機会を準備することは当然と言えよう。

人文社会学類には、外国語に関する「学びの最適化」を指向する【言語インテンシブコース】がある。これは、学生が意中の外国語を自ら進んで履修するコースで、〈英語コース〉と〈韓国語・中国語コース〉に大別される。英語コースは、1年次から履修できるコースで、2年間で16科目（1クォーター毎に2科目）が配置されている。韓国語・中国語コースは、1年次に教養教育科目の韓国語Ⅰ・Ⅱ、ないしは中国語Ⅰ・Ⅱを履修した後、2年次から履修できるコースで、1年間で4科目（1クォーター毎に1科目）が配置されている。

外国語学習は、言語インテンシブコースを履修する学生にとって、学びの全てではなく一部に過ぎない。本コースは「外国語学習の知的訓練を通して、新たな可能性を切り拓くことのできる学生を育成する」ことを、教育の目的としている。つまり、外国語学習・教育それ自体を目的としている訳ではない。本コースを履修する学生は、それぞれの目標を掲げて外国語を学び、習得した外国語能力を活かして、それぞれの自己実現を達成する。外国語学習は、あくまで学生個々の目標を達成するための手段なのだ。

言語インテンシブコースでの外国語学習は、多様で自由な学びのモデルとなるはずだ。目下のところ、本コースには、英語、韓国語、中国語の3言語が用意されているが、将来的には他の外国語が追加されることが望ましい。多くの言語が選択肢としてある中から、自ら学びたい言語を選んで学べる体制こそが学生の多様な学びを担保するからだ。それでも、必修科目として与えられた言語を学ぶのではなく、「自ら主体的に学びたい言語を選ぶ」スタイルは、学生それぞれの志向に叶うものであり、教養教育科目においても検討されたい方法だ。

何かを学びたいと構想する学生には、学びたいと考えるそれぞれの理由や動機があるはずだ。しかし、すべての学生が、各々の学びに理由や動機を見出すのは容易なことではないだろう。「学びの最適化」には、システムとして学生が学びやすく、選べるものを用意することだけでなく、学生が自身で学びをカスタマイズすることや、目標達成までの学びのストーリーをつくる必要がある。学生がそれぞれの学びの青写真が描けない場合には、教員の意見が大いに役に立つだろう。そうした点で、アドバイザー制は「学びの最適化」の実現を助けるためのもう一つの重要な核となるのだ。

さて、冒頭の話に戻ろう。大学の英文科に入学したころの私の目的はただ「英語を学ぶこと」で、目標は「英語が上達すること」だった。しかし、英語を使う仕事に就くことをあれこれ考えるうちに、「英語教員になること」が新たな目標となった。というよりは、それが目標だと自分に言い聞かせた、という方が正確だったかもしれないが。非常勤講師とはいえ、英語教員となってさらに目標は変わっていった。いつしか目標だった「英語」は手段の一つへと変わっていた。

二十数年前、物事はもっと単純だった。大学選びは、文系か理系かである程度は事足りた。私自身、将来の目標を明確に描かなければならなかった記憶はない。上述した通り、私の場合は、学びながら目標が移り変わったし、(決してあるべき姿ではないだろうが)それでよかった。しかし、今の時代はそうはいかない。自分の将来をなるべく具体的に想像することを求められ続けるのだ。本当は自分の未来をくっきりと思い描くことができる人なんて多くはないのにもかかわらず。

とにかく「学びの最適化」の準備は整った。あとは、個々の学生がこのシステムをどう利用するかにかかっている。「自分の意志」や「主体性」、「自由」といった言葉は、学生個人の思いを大切にしたい表現だ。しかし、一方でこうした言葉には、学生側の責任が伴うことを忘れてはならない。自分の意志や主体性がなければ、何も「最適化」されない。自由に学びを選べるとしても、個別の意見や考えがなければ「最適な」学びとはならない。

学びの最適化のために、私ができるアドバイスがあるとすれば、「対話をしよう」ということに尽きる。自分の意志や主体性を持つために、自由に何かをするために必要なことは、他者に関心を持つことだと思う。自分の殻に閉じこもり、他者の意見に耳を傾けなければ、自分の意志や主体性など育まれない。だから、他者に関心を持って、他者と対話をしよう。そうすれば、きっと自分らしい学びのカタチが見つかるに違いない。

保育実習指導における学生の学びの最適化について考える

准教授 前 田 有 秀

1) 本稿の背景

保育士だった私が大学教員を志したのは、良い保育者を養成したいという思いからであった。それに直結する授業が保育実習指導である。2014年に着任し、保育実習担当として保育